

# 高知県宿毛市押ノ川および愛知県田原市野田から得られた 最終氷期最盛期頃の花粉化石群

○三宅 尚・原田 稜（高知大・理）

最終氷期は地史上、最も新しい寒冷期であり、その最盛期は約 3 万～1.5 万年前とされる。最盛期とその後の温暖化期は、現在の植生や植物種の地理分布に直接、影響を及ぼした重要な時期である。このため、1980 年代までに最盛期の植生図が Tsukada (1985, 1988) などにより提案されており、現在、1980 年代以降に新たに得られた植物化石データも加味して、植生図を検証する研究が進められている。しかしながら、日本の太平洋沿岸低地では最終氷期最盛期の花粉化石データはまだ少ない。

本研究では、高知県宿毛市押ノ川と愛知県田原市野田に分布する低位段丘面下堆積物の花粉分析を行い、調査地周辺における最盛期頃の植生を復元した。また、西南日本の他地域の花粉化石データも加え、西南日本、特に太平洋沿岸低地における最終氷期最盛期の植生分布について議論した。

いずれの調査地でも、産出した花粉化石の過半をヨモギ属、イネ科などを主とする草本花粉が占めた。木本花粉の内訳を見ると、押ノ川ではクマシデ属、コナラ属コナラ亜属、ツガ型、ウコギ科、ハシバミ属花粉などが優勢で、野田ではカバノキ属が多産し、コナラ属コナラ亜属、ツガ型、コメツガ型、ハシバミ属花粉などが高率で出現した。

西南日本の花粉化石データを見ると、本調査地と同様に、花粉化石の過半を草本花粉が、木本花粉の過半を落葉樹花粉が占める調査地は、九州東南部と四国南部の沿岸低地に分布していた。Tsukada (1988) は西南日本の沿岸低地には落葉広葉樹を含む温帯針葉樹林が成立していたと推定した。しかし、太平洋沿岸低地ではヨモギ属、イネ科などが優勢な草原マトリクスに、クマシデ属、コナラ属コナラ亜属、カバノキ属などの落葉広葉樹が優勢で、ツガなどの温帯針葉樹を伴う森林パッチが点在する植生が成立していたと考えられる。風成塵や海洋微化石の知見に基づくと、最盛期の日本列島では冬モンスーンが卓越し、気温の低下とともに、冬期降水量が減少し乾燥していたと推定されている。しかし、夏モンスーンの影響範囲を指標する亜熱帯ジェットの吹送位置が日本の太平洋沿岸にあり、冷水塊の影響で部分的に蛇行し弱体化しつつも、黒潮暖流の流軸位置が現在とほぼ同様であったとすると、太平洋沿岸低地では落葉広葉樹林の成立を許す夏期降水量が存在した可能性がある。